

貝津田諏訪神社の起倒流棒の手

『師範允許』 いんきよ

棒の手は、愛知県に伝わる代表的な民族芸能の一つである。名古屋市内東部から尾張東部、西三河を経て、設楽町貝津田に至る広い地域で行われている。設楽町貝津田は棒の手の東限の地である。

棒の手の起源は、農民武芸説や神事芸能説などがあるが、明らかにってはいない。

棒の手の流派は、大小十六種あり、貝津田諏訪神社で行われている棒の手は『起倒流』である。起倒流は、那古野(現名古屋市)の起倒次郎左衛門が天正時代(一



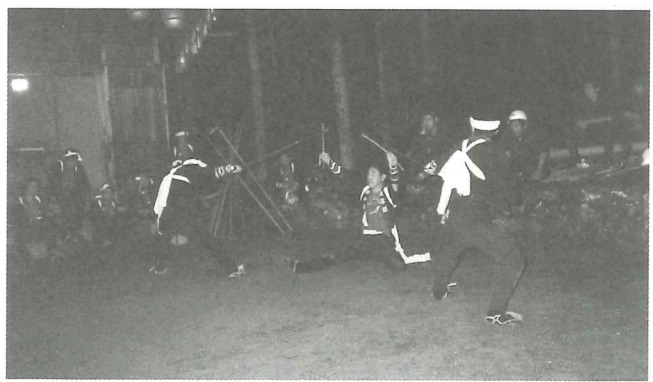
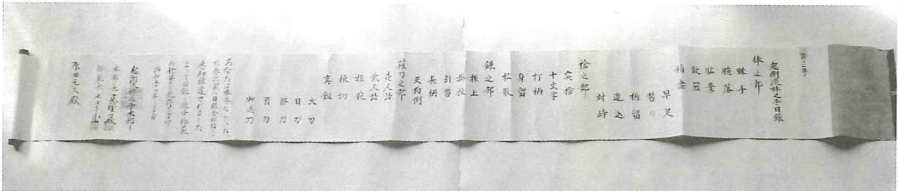
五七三(一五九二)に創始したと言われている。次郎左衛門の流技は、特に槍術を得意としており、他に例がない。

安政六年(一八五九)から慶応二年(一八六六)にかけて、石楠町(現豊田市)の四人は、長久手の近藤芳左衛門氏の門人となり、技の修得に励んだ。慶応二年免許目録が許され、同時に三河地方の起倒流の宗家師長となった。四人は、石楠町棒の手組を結成し、起倒流の奥義の伝承に努めた。また、宗家として多くの門人の指導にあたりると同時に、二〇〇人余に免許皆伝目録を交付している。



昭和五十四年八月十九日、設楽町貝津田でも十四人が目録を伝授され免許皆伝者となった。

棒の手は、表・裏の二つの型があり、表型は棒と木刀のみである。裏型は真剣・薙刀・槍・長柄鎌等のキレモノを用い、これらの武具を組み合わせて、二人一組・三人一組・四人一組の演技が行われる。



毎年八月十九日、諏訪神社祭礼当日、会所に勢ぞろいし、貝津田に棒の手を招致した故原田徳四郎家から出発する。

道行は先頭に高張提灯二張、次に法螺貝、続いて演技者(少年、青年、壮年)が二列縦隊で進み、道路に沿う民家の庭前で一手ずつ演技し、諏訪神社の森下に至る。ここで隊列を整え、「ワツシヨイ・ワツシヨイ」の掛け声で宮坂を一挙にかけ上がる。これを宮入という。拝殿前に整列し神宮の祓(はら)いをうけ、拝礼の後、掛け声勇ましく少年は一手、青年は二手を奉納する。その後、別に設けられた演技場に移り、まず塩ふりが清めの塩をまくと、

法螺貝が鳴り、両側の演技者は、会釈して演技を始める。

(設楽町文化財保護審議会委員
原田 元久)